

誘引性のある空間

垣間見える奥の空間構成要素の変化

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB3222 矢板 悟

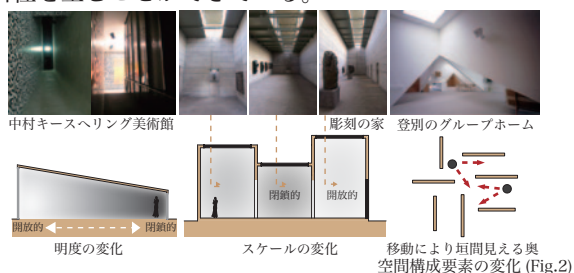
01. 奥の空間に引き込まれる体験

地下空間を進む時に突然地上のように自然光が指す開放的な空間や、先が見えない薄暗い空間に出会った時に引き込まれる感覚を覚え、建築が人を空間に引き込む場に興味を持った (fig.1)。人が奥の空間の誘い引き込まれるのはなぜだろうか。

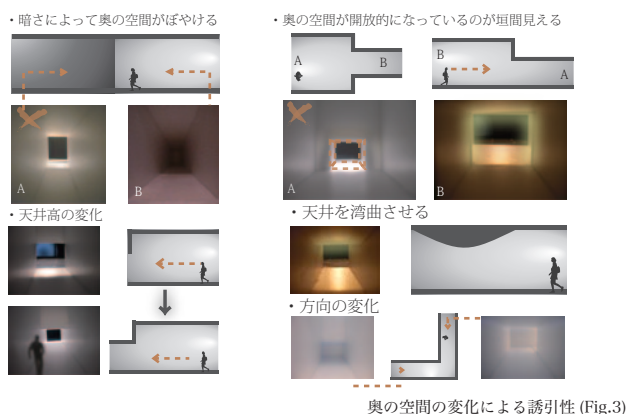


02. 空間構成要素の変化

既存の建築において奥の空間構成要素を変化させることによって誘引性を生む空間を調査した (fig.2)。スケールや明度の変化、壁面の操作を加えることで奥の空間に開放感や閉塞感を与えることで奥の空間に興味を持たせ、誘引性を生むことができている。



上記のモデルをもとに空間の対比によって誘引性を生むモデルを作成する。下図 (fig.3) の視点 A からのように奥の空間の変化がはっきり認識できる空間や、奥の空間に変化が無いものは想像を膨らませることがなく、誘引性は生まれないのではないかと考える。視点 B のように奥の空間の変化が断片的に垣間見えることによって引き込まれるのではないかと考える。



04. 多様な誘引性をもつギャラリー

誘引性を用いて街のギャラリーを設計する。スケールの異なった様々な空間を秩序無く配置し、開口によって明度に変化を与える (Fig.5)。奥の空間を変化させることにより興味を惹き、誘引性を生む。訪れる人は狭くて暗い空間、広く解放的な空間など様々な奥の空間を垣間みることによって奥へ進み、新たな発見を繰り返す (Fig.6)。



複数の空間と繋ぐことで同一視点から様々な奥の空間が垣間見え、多様な誘引性を生む (Fig.7)(Fig.8)。



どのような空間に引き込まれるかは人によって異なる。順路を持たないギャラリーは誘引性のある空間によって、人を誘導する。訪れる人によって順路が変化するため人の数だけ体験が生まれる多様な印象を持つギャラリーができる (fig.9)(fig.10)。

